

した。

(二) 分遣隊員に脚気患者が続出した。加納は今より分遣隊に行き脚気患者を治せという命を受け、本島アイミリキに行く。早々より現地民の家を回って、食べられる青葉ものを教えて頂き、お汁より葉の方を多く与えました。またタロイモも教えて頂き、満腹感を与えるのに役立ちました。患者も五分の一に減り部隊長に喜んで頂きました。

(三) 暁島本部へ糧秣受領に行く。海上輸送より他になく、昼の行動は許されず、闇夜満潮時を利用し、爆音がすれば岸のジャングルに隠れる。このような時には必ずラバウル小唄が口に出る。

煙草は吸えない。爆音がなくなればまた走る。

(四) 炊事をするには昼は煙が上がる。夜は光がもれる。夜は照明弾を落とされると直ぐわかる。このような状態にならないよう遮蔽の方法に苦勞しました。

ペリリユ、アンガール両島が玉砕したことを聞く。

四、五日でアメリカ軍が飛行場を作る、その機械化にびっくりす。それより飛行機来襲が甚だしく、どこにいても

安心できない。艦砲射撃で防空壕の入り口に砲弾が落下し、中にいても危険で、コロル島の街は一軒の家もない焼野原となりました。

戦争終結し、捕虜生活も終わり、十四師団最後の引き揚げで浦賀上陸復員す。通算年数現役もいれて十一年七ヵ月です。

初年兵の思い出より復員迄

奈良県 岩井幸治

顧みますれば、昭和十八年九月一日全国より選ばれし精銳七五〇人、門司に集結、朝鮮平壤第九十二部隊・第一航空教育隊に現役入隊、軍装一式拝受す。頭に星の輝く軍帽、軍服、腰に帯剣佩用す。

指揮官いわく、お前たちは速やかに宿舎に直行せよ、我々軍服着用、意気軒昂なり。後で鉄拳を食らうとは露しらず、宿舎に直行せず遊廓の前を通り意気揚々と宿舎に向かう。暫く行くと鬼軍曹と出会う。「貴様らはどこ

を通過して宿舎に帰るのか」大きな声が終らぬうちに鉄拳が飛び、軍帽は吹飛び我と戦友意気消沈、早々に宿舎のお寺に帰館す。

住職さんの奥さんいわく。何時もの所で新兵さんが殴られていたと近所の奥さんたちが話していたことを、我と戦友に話してくれた。殴られていたのは我々二人ですとも言えず後で、我と戦友は大笑い。若き初年兵、思い出のひとつコマであります。

初年兵の思い出より始まり、第九十二部隊において長い長い六か月の猛訓練が終わり、南方派遣軍・襲九三二一部隊に転属の命令下る。先発隊一〇〇人の同年兵バシー海峡で全員戦死の報らせあるも、悲喜こもこもの思い出を残し輸送指揮官・渡根本少尉、畑軍曹、関口伍長の指揮により鬼の一教を後に二百人の勇士、勇躍一路南下した。門司港より輸送船扶桑丸一万二〇〇〇屯に乗船、関東軍、航空隊の精鋭一万余、三五隻の大輸送船団、駆逐艦、駆潜艇八隻護衛のもとに比島マニラ港に向け出港、途中、台湾高尾港に寄港す。湾入口に三隻の沈没船あり、マストのみ残し他は海中なり。

某月某日高尾港出港後、命により扶桑丸機関室勤務、船員不足のため総員二四人三交代、八時間勤務だったと思う。一教より尾崎、小川、松村、ほかは氏名不詳八人くらい、七教の戦友、機関室に上番勤務。我ら一教は下番、後甲板において仮眠、我フンドシ一枚で仮眠中、尾崎が「松村、起きろ敵襲だ」との一声に飛び起きあたりを見れば、暗夜の空に曳光弾が飛びかう。それを見ながら軍衣袴、帯剣、カボック（救命具）を着用、その時すでに船内は阿鼻叫喚、つかの間、魚雷一発命中、続いて二発目が機関部に命中、七教の勇士十八人船員諸氏壮烈な戦死なり、瞬時、扶桑丸は幾千の戦友を道連れにバシー海峡に勇姿を消したり。

幸か不幸か我、戦友とともに夜光虫の光るバシー海峡に放り出され漂流、夜明けとともに波高く波に押し上げられると、あまた戦友の姿が見えかくれ、波が下がると我一人なり、その時、戦死せる戦友が漂流しながら我に近づけり。

その時の心細さ十二時間後、駆潜艇に救助され比島サンフェルナンドに上陸、陸路、生き残り戦友とマニラに

出発、一教を出発した時の勇姿なし。マニラ到着、城内に入る。

数日後、一難去ってまた一難、アメリカ空軍のグラマン戦闘機、延三〇〇機、五〇〇機の大空襲あり。翼に星のマーク、パイロットの眼鏡、首には純白のマフラーをなびかせながら低空より機銃掃射、我、生きた心地なし。今でも眼に浮かぶなり。すでに比島は戦場なり爆撃により瀕死、重傷の軍馬約二〇〇頭、口きけぬ軍馬悲惨なり。涙こらえ射殺せるを目撃す。数日後、戦友ともどもシンガポールに向けマニラを出発す。

五隻の船団に駆潜艇二隻護衛にあたる。途中ボルネオ島沖で僚船一隻に魚雷命中、時刻は十四時ごろと思う。我らが乗船する本船は前方より波をけだてて突き進んで来る魚雷二発を交し、無事ボルネオ島ミリ港に停泊す。その後シンガポール、ジャワ島スラバス兵站に集結、暫らくして一教より速水、富田、寺山、早川、小川員、小川、松村の七人はスマトラ島パレンバン第十六野航第三分隊に転属、終戦。英国軍の指揮下に入り、ガララン島において捕虜生活、二十一年七月、広島県大竹港に上陸、

現在に至る。

初年兵の思い出より始まり、終戦までの概略を記述致しましたが、四十年前のことなので誤りがあると思いますが、お許しを願いますとともに、思い出を記述させて頂きました。

終始初年兵

山形県 富樫 大助

大東亜戦争に二年九ヶ月、初年兵として参加、思い出の一部しか表現できませんが、忘れてはいけぬ戦争体験を、拙い文章で綴ります。

戦争もたけなわの昭和十八年二月、関東軍に現役兵として入隊のため、新潟県松村部隊に集合、三週間ほどの教育を受けて、満州に向かつて出発。二月下旬に牡丹江の第四独立守備隊二十大隊三中隊に到着しました。そこで本格的に厳しい初年兵教育を受け、満鉄警備に配置されました。